# おばあちゃんの背中

久米島町立西中学校　一年
相良　萌子

「おばあちゃん！元気だった？」　月に一度、久米島から本島に住む曾祖母に会いに行く。

「アイヤァーもおえぇ、元気だったねえ」

曾祖母は、曲がった腰を揺らしながら、玄関で私を出迎える。しわだらけの優しい笑顔が美しい。本人いわく、若い頃は可愛かったは、あながち嘘ではないのかもしれない。

曾祖母は、今年で確か、数えの九十二だ。本当の年齢は定かではない。戦後のどさくさの中、戸籍が間違っただの、昔は数えで歳を言うのが普通だったから、今のやり方はわからないだの、歳の話題になると話がこじれ、家族喧嘩になるのが落ちである。新年のお守り干支で、もう何回もめただろう…。

曾祖母は、私をそれはそれはかわいがってくれる。まだ腰もまっすぐだった頃、赤ん坊の私を抱いて歌を歌ってくれたという。私がおすわりができるようになった頃は、何時間でも横に座って、絵本を読んでくれたり、話を聞かせてくれていたらしい。

「あんたは、私の宝さあ。」

今だって、曾祖母は私の笑顔に愛おしそうに目を細める。

そんな曾祖母は、あの、沖縄戦の「カンポー　ヌクェーヌクサー」だ。まだ二十歳そこそこで、戦により妹を亡くし、目の前で友を殺され、母とはぐれた。大事なものをたくさん失った。そして、多くのものに、裏切られた。

「イクサは、ナランドォー。」

曾祖母の目の奥がどこか遠くを見つめる。

『ああ、おばあちゃん、また思い出した…。』

愛する者、大事な者に固まれると、決まって見せる、あの瞳。

最近曾祖母は、戦の話を私によく話して聞かせる。一九四四年那覇の十・十空襲で当時働いていた床屋が跡形もなく焼けたこと、そこの主人や奥さん、娘が防空壕の中で死んだこと。仲良しの友達が爆弾に当たって一ヵ月後に息を引き取ったこと、お見舞いに行った時には、小さな位牌になっていたこと。やんばるに逃げる途中、えのびの山で黒砂糖をなめながら見上げた空に、米軍の飛行機が飛んでいたこと、今考えればあれは三月二十六日、きっと、渡嘉敷島に向かう米軍だったのではないか、ということ…。話は、尽きない。静かに、淡々と曾祖母は語る。

でも、辛く悲しい中に、印象深い話がある。私が一番、好きな話だ。

曾祖母は第三十二軍牛島満司令官の散髪担当者だった。まだ司令部が首里城の地下にアリの巣のように張り巡らされていた頃、四十五年四月の米軍の本島上陸より前の話だ。東京に住んだ経験があり、標準語が話せた曾祖母が、散髪の担当となったらしい。

「牛島さんはね、私が店の主人の煙草を配給で朝早くから並んで手に入れるのを聞いて、『それは大変だねえ。』って言って、三カートンも持たせてくれたんだよ。『一つずつ、渡すんだよ。』って。又ね、こんな事もあったよ。熱い日だったね。牛島さんの断髪に行ったら、氷にシロップをかけたものを御馳走してくれてね、おいしかったよぉ。牛島さんに最後に会ったのは、まもなく米軍上陸って頃だったよ。龍浬池の横でね、私が歩いていたら、車で通りかかって、わざわざ降りてきてくれてね、『お体を大切に、無事でいて下さいね。』って、優しい笑顔だったさあ…』

牛島さんの話をする曾祖母の表情は、いつも穏やかだ。まるで大切な思い出を語るようでさえ、ある。

でも、曾祖母はちゃんとわかっている。誰よりもわかっている。牛島司令官が二十万近くの人を殺した人間であるという現実を。曾祖母は戦後六十九年が経つ今も、その現実と

向き合い、「牛島さん」と「午島司令官」との狭間できっと、苦しんでいるのだ。
「イクサは人間を角のない鬼に変えるんだよぉ。」
曽祖母は、最近丸い背中をもっと丸めて、熱心に本を読む。戦争について述べられた、史実をまとめた本達と、静かに向き合う。
「きっと、自分の中の戦争を、客観的な事実として捉え直そうとしているんだね。」
私と同じ曽祖母が大好きな母が言う。
私は、戦争が憎い。まだたった十二年しか生きてない、難しいことは何も分からない。けど、戦争は大嫌いだ。大好きな私の「おばあちゃん」を六十九年も悩ませて続けて、きっとこれからも苦しめ続ける戦争なんか、許さない。
もうすぐ、戦後七十年を迎える。世の中の考え方が変わってきたこともニュースで見る。でも、私の「おばあちゃん」の世代が必死に伝えようとしていることを、私達を含めたみんなで、聴いて、受けとめなきゃいけない。
私は絶対に、戦争を許さない。そして、戦争を、絶対にしない。